

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内

洛友会

〒606-8202

京都市左京区田中大堰町49

075-701-3164

洛友会の改革

—変えるべきことと変えざるべきこと—

東京支部長 角 忠夫 (昭35年卒)



1 はじめに

東京支部の内規で年次送りにて1年を副支部長、翌年支部長を担当することから、この2年間東京支部活動の幹事役を仰せつかっている。小泉内閣の「聖域なき構造改革」も大分あやしくなってきたが、世紀の変わり目に機を合わせたごとく政治や経済の大激変で20世紀の日本経済を支えた電機メーカーも激震に揺れている。マンハッタンも破壊しかねないテロまで勃発する時代に同窓会のみ孤高を保つ例外ではありえず、90才代から20才代までの幅広い層を有する洛友

会東京支部のあり方につき、総会や幹事会での討議が続いている。2年間の支部活動を通じての報告と改革の意図につき述べ、会員各位のご批判を仰ぎ、支部活動の前進につなげたいと考える。

2 同窓会は斜陽か

支部総会は例年100名内外の参加である。2000名程度と推定される潜在会員数からは少ないとも言えるが、会場や経費の点からの制約もある中で昨年から総会に必ず講演会を併催したこともあり、参加各位には好評を得ている。昨年は千本倅生氏(昭41、イーアクセス社長)から「ブロードバンド時代の到来と起業家精神」で、先端の通信事業やグローバルに活躍されている立場より大いに発破を掛けられた。一昨年には時の人樋口広太郎氏(昭24、経、アサヒビール名誉会長)の「21世紀日本新生に向けて」は経済学部同窓会

との協賛もあり160名を超える参加者を得、又昨春のNTTドコモR&Dセンター見学会には、第3世代「ケイタイFOMA」の実用直前ということもあってバス2台の物理的制約で多くのキャンセル待ちの皆さんに失礼するほどの盛況であった。

秋の伊豆グルメ旅行では、途中東名の大渋滞にもかかわらず同伴の奥様達を含む全員の自己紹介は電気工学今昔物語も飛び出す誠に興味深いもので、洛友会ならではの旅となった。

友の歴史の 樂しかりきを

当日は愛子さん誕生のハプニングまであり参加者一同思い出に残る一日になった。

伊豆の浜 渡る夕日に 紅葉映え

洛友会を楽しみにしていただいている層が確実に増えていることを実感している。

3 e-洛友会

東京支部は若手幹事団の献身的努力で平成12年よりホームページを立ち上げたし、総会、見学会、旅行会等の案内は可能な範囲eメールに切換え、通信費の低減と迅速性に寄与している。本年2月に開催された本部役員会で、名簿のCD-ROM化や会報のホームページでの案内の併用につき討議され、これらは今後洛友会全体で方向付けされていくことになる

が、本部事務局と支部間での電子メールによる連絡網の確立は早急に、と懇請した。充実しつつある支部会員のメールアドレスのセキユリティを充実しての解放と、ホームページへの幹事からの報告ならびに興味の会や学年クラス会の連絡網への拡大を図っていききたいと考えている。海外在住の会員からのホームページによる東京支部ニュースに対する感謝のメールで、幹事団は勇気付けられている。

4 支部会則の制定

洛友会会則は、名簿の最初に掲載されている通り支部会則は各支部にて作成するとなっていたが、東京支部会則はまだない。今迄無くて不自由しなかったのだから今更必要かという意見も頂いているが、広がりつつある支部活動全般のオンライン化と、価値観の多様化の時代でもあり会員数の増加にともない昨年来幹事会での討議を続けているが、次回総会での制定を提案したいと考えている。

5 大学と洛友会

毎年総会に本部より教室の先生方をお招きし、教室現況の報告から赤レンガへのノスタルジアや桂キャンパスにまつわる新しい息吹に触れさせていただいている。本年の総会時には、最近富に賑々し

くなってきた「産学協同を考える」のテーマで、大学ならびに産業会の代表よりそれぞれの立場からの提言と、参加各位との活発な討論を予定している。限られた機会ではあるが、大学からのメッセージの発信と産業会との交流の場として活用され、それを機会に大学と会員各社間でより強いパイプが確立しました広がって行くなら、洛友会の意義が倍化することになる。

6 若年層の参加

支部活動はお陰で盛況なるも、残念ながら若年層の参加に関しては一向に前進していない。見学会等は訪問先事情により週末の開催は無理であることも起因しているが、総会や会費納入に対する若人の参画をもっと積極的に働きかける必要がある。電子メールやホームページへのアクセスの増加、若人達への魅力あるプログラムの提供、一度参加すれば計算高い現代の若者たちゆえ先輩を利用する効果を本能的に嗅ぎ分けることを考えても、継続して働きかけていかねばならない。

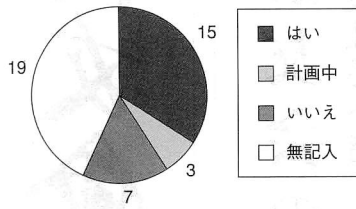
7 さいごに

洛友会には、いかにグローバルな時代とは言え、人生の最も輝いていた青春時代を京都で共に楽しんだという体験を共有する事実がある。特にその後の人生の大半を京都を離れて生活している東京支部会員にとって、社会的に最も必

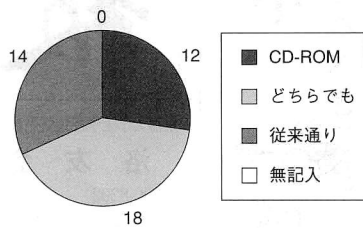
要とされる時代においても、又人生の黄昏時代を迎え始める時にも、洛友会は尚更かけがえの無い我が人生の誇り得べき宝石である。それだけに京大電気という共通項で結ばれる連帯意識は、初めてのビジネス上でめぐり会える時においても、或いは同窓会における遠い空間を超えての再会においても、瞬時に融合し合える不思議なケミストリーを持っている。これこそが世の中がいかにも変わろうとも決して変わる事の無き、また変えてはいけない洛友会のルーツとして会員各自が大事に育てはぐくみ継承していく財産であり洛友会の存在意義であるとの使命感に駆られ、若き幹事諸君達と共に支部会職務にはまっています。

見学会参加者によるe化アンケート
(2月22日 見学会の皆さんから)

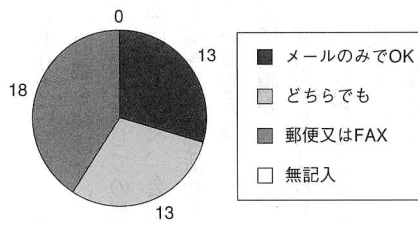
Q: 職場または家庭でインターネットを活用されていますか。



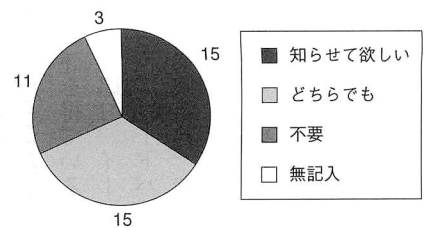
Q: 洛友会名簿をCD-ROMで配付する案があります。



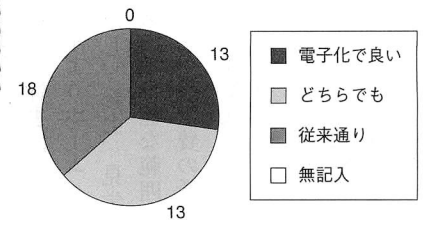
Q: 今後東京支部からの案内を電子メールでも行っていきます。



Q: 支部会員のメールアドレスが充実しつつあります



Q: 洛友会会報を電子化(ホームページ掲載)の案があります。



大学の動向

桂キャンパスだより

電気電子工学科長 石川順三
電気工学専攻長 奥村浩士
電子物性工学専攻長 北野正雄

平成11年度の補正予算で、工学研究科、情報学研究科の桂キャンパス移転のための一部予算が認められたことにより、現在移転のための作業が進みつつあります。移転の全体計画としては、写真に示すように四つのクラスターに分かれており、クラスターAが電気系・化学系ゾーンになります(電気系の建物は、最も左の建物)。クラスターBが共通施設ゾーン、クラスターCが物理系・建築系ゾーン、クラスターDが情報学研究科ゾーンです。

クラスターAの電気二専攻(電気工学専攻、電子物性工学専攻)と化学系教室は、移転時期が最も

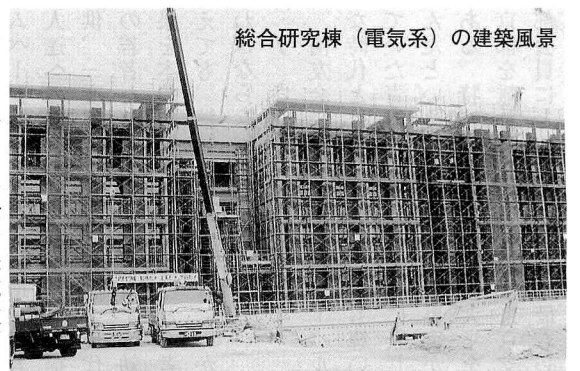


早く、平成15年の春から実際の移転が始まります。現在、電気系の建物(正式には総合研究棟IIと呼ぶこととなります)の建築は、写真(2月5日撮影)に示すように、外装が終わり内装に入っています。地下1階、地上4階の口の字型の建物で、電気二専攻とイオン工学実験施設が入ります。情報学研究科の移転は、最後のグループで、平成19年度に予定されています。

桂キャンパスの場所は、京都市西京区の桂御陵と呼ばれる丘陵地で、近くに苔寺があります。最寄りの駅は、阪急電鉄京都線桂駅です。現在の吉田キャンパスから直線距離で西南西に約10km離れており、車で約40分の距離です。

このように電気系教室の大学院(研究室と大学院教育)は桂キャン

総合研究棟(電気系)の建築風景



桂キャンパスに移りますが、学部教育は従来通り吉田キャンパスにて行われます。

桂キャンパスの状況については、また折に触れて洛友会会報でお伝えしたいと思います。

教室だより

平成13年度電気電子工学系就職状況

電気電子工学科長 石川順三
電気工学専攻長 奥村浩士
電子物性工学専攻長 北野正雄
通信情報システム専攻長 森広芳照

工学部の電気電子工学科に入学した学生の大学院の進路は、工学研究科、情報学研究科、エネルギー科学研究科に分かれており、それ

平成13年度卒業生進学就職状況

工学研究科 (電気工学、電子物性工学専攻、情報学研究科 (通信情報、知能情報、システム科学専攻) エネルギー科学研究科 (エネルギー社会・環境科学、エネルギー基礎科学、エネルギー応用科学) 電気電子工学科、

Table with columns: 修了、卒業生数, 修士, 学部, 進学・就職先. Rows include categories like 進学, 計, 官公庁等, 電気関連, 通信, 電力・ガス, 機械・自動車, 化学等, 鉄道, 放送・新聞, コンピュータソフト関連, 金融・商社等, 未定・研究生・帰国, 計.

それぞれの研究科において独自の就職指導が行われています。今年も、電気電子工学科の学部学生と工学研究科電気工学専攻および電子物性工学専攻の大学院学生の就職の世話は共通で行いました。また、情報学研究科およびエネルギー工学研究科の関連専攻の大学院学生の就職の世話は、各専攻で独自に行いました。その中で、学部と工

学研究科の学生の数が比較的多かったこともあり、それを担当した者から就職に関して気付いたことを報告させていただきます。平成13年は米国のIT不況から始まり、同時多発テロなどの影響もあって日本の経済状況も決して良い状況ではありませんでした。が、電気系教室へ多くの企業から推薦の依頼がありましたことは、

大変ありがたいことでした。従来からの電気関連企業ばかりでなく、機械・自動車・化学等の業種の多くの企業からも推薦依頼をいただきました。また就職を決める段階で、学生と職場のマッチングを重要視する企業が多くなりました。さらに、4月採用だけでなく、通年採用も歓迎する企業も増えてきました。別表は、平成13年度における電気電子工学系学生全体の就職状況を示したものです。業種別にみると、電気関連は全体としてほぼ昨年と変わらなかったのですが、工学研究科に限りまして4割近くに減少しました。その減少した学生は、機械・自動車・化学等の企業へ行くようになり(約3割)、電気系の学生がより広い業種で活躍しようとする傾向がみられます。通信関係への就職が減少したのも今回の特徴です。

表にも記しましたように、博士進学者の数は昨年より大幅に減少しました。数年前に大学院重点化が行われましたが、その目標の一つに博士課程進学率の向上があります。ところが、それと全く逆の現象が最近生じています。それは種々の原因がありますが、重要なものとして博士課程修了後の就職先が少ないこと、またその待遇が十分でないことが挙げられます。電気系教室では、今後優秀な学生をできるだけ博士課程に進学

させ、社会に役立つ教育を行っていく方針です。各界におきましても、電気系の学部学生、修士学生に加えて、博士学生への就職へのご理解を宜しく御願いたしませ

教官の異動

退官 (平成14年3月31日付) 電気工学専攻 宅間 董 教授 転出 (平成14年4月1日付) 情報学研究科 小林和淑 助教授

昇任 (平成14年4月1日付) 電気工学専攻 古谷栄光 助教授 新任 (平成14年4月1日付) 情報学研究科 天野晃助 教授 (広島市立大学より) 朝香卓也 助教授 (日本電信電機より)

会員寄稿

「音楽をプレイするならギター?」

水谷 敦史 (昭62卒)

私が中学入学と同時にギターを初めて手にしたのは、明らかに父の影響でした。といっても、父は別に音楽家でも音楽の教師でもありません。ただの「音楽を自ら奏でて楽しむのが好きな人」です、その頃の父は勤めにも割に余裕があったらしく、謡曲(声楽の一種とも言える?)を習ったり、尺八、ハーモニカ、ギターなどを家でよ

く鳴らしたりしていました。音楽の専門的な教育などぜんぜん受けていない筈なのに、ちゃんと五線の譜面を読みながらギターをつまびいていたというのは、なかなか大したものであると感心します。ただ曲目は歌謡曲のみでした。「影を慕いて」「湯の町エレジー」のイントロが毎晩のように繰り返されました。父がギターを身近なものにしてくれたのです。

父譲りで「大衆的な」音楽好きの私は、小学校時代には縦笛とハーモニカを愛用しておりましたが、我ながら熱心な練習を繰り返して、十分に極めたと自ら信じる(?)レベルに達しました。そこで、中学生になって十分に手指が大きくなると、いよいよギターに挑戦することにしました。先生について習ったわけではありません。独学でのトライです。ギターは父と共用で、「ガットギター」あるいは「クラシックギター」と言われるタイプでした。さすがに古賀政男作の歌謡曲シリーズは中学生向きではないと感じたので、教則本を買い求め、アルペジオだのトレモノだのの練習に精を出しました。教則本には「近代ギターの父」と呼ばれるタレガヤソルの練習曲が散りばめられていました。

今でも残念なのは、アカデミックな音楽と縁遠い我が家にはステレオ装置やレコードが無かったので、模範演奏を聞くことができな

かったことです。譜面を一つ一つ読む作業を積み重ねて「禁じられた遊び」や「アルハンブラ」の音をなんとか並べられるようになった。でも、原曲を聴いたことが無ければ、とても音楽としての再現は無理です。結局、我流の悲しさ、私のクラシックギターへの最初の挑戦は、人様に聞かせられるレベルに達することはありませんでした。

ところで、楽器としてのギターの特徴はいくつか考えられます。

まず発音のメカニズムが原始的とも言えるほど単純明快であることでしょう。弦を弾くだけです。強く弾けば大きい音、弱ければ小さい音で発音され、その感覚はかなり線形でコントロールは容易です。余計な介在物なしに指先の方が直接「音」に変わるのを実感できません。演奏者の感情を表現しやすいとも言えるでしょう。もともと、ちゃんと音を出せるようになるには、尺八や管楽器ほどでないにしてもピアノよりは難しく、相当程度の指先（特に左手）の鍛錬を必要とします。二つ目の特徴は、和音を出すことによりハーモニーを構成できることです。ギターの弦は6本しかないのに複雑なコードには困難なものもありますが、一人でオーケストレーションができるという楽しみが可能です。三つ目には、音程の融通が効きやすく表現の自由度が大きいことがあげられます。6本の弦のチューニン

グは自由自在ですし、ピブラートやチョーキングと呼ばれるテクニクによって無段階に音程の上下が可能です。そして最大の特徴はピアノに比較して安価かつ持ち運び自由というところにあります。

これらの特徴から、ピアノを習いたくてもチャンスの無かった人や、手軽に一人でどこでも演奏を楽しみたい人にはギター愛好者が多いと思われます。父も私もその部類なのでしょう。

大学に進むころには、私の好んで弾くギターは「エレクトリック・ギター」略して「エレキギター」に変わっていました。ご存知のとおり、エレキは弦の近くにおいたマグネチックピックアップによって、弦振動を磁界の変化として空間を通して検知し、電気信号として取り出します。この「電気信号に変換」することによって、サックスやドラムに負けない音量を（アンプを通じて）出したり、エフェクトと呼ばれる音色加工が自在にできるようになり、ギターは楽器としての可能性を大きく広げたと言われています。ジャズやロックは二十世紀の音楽文化の中で重要な位置を占めています。リズムを重視するためにアフリカンリズムの申し子であるドラムセットを、さらにソロ楽器として管楽器を用いることがあります。アコースティックのみのギターでは、特に音量の点でそれらとアン

サンプルを組むのは困難でしたが、エレキギターによって可能となりました。ただ、自分の指先で奏するというデリケートな感覚はエレキギターではやや希薄です。弦振動は空間を隔てて電気信号へと形を変え、アンプを通し、別の場所のスピーカーで初めて自分の耳にフィードバックされるわけですから。音楽としては個人の好み

が分かれるところでしょう。

就職しても結婚してもギターはいつも私の手元から離れることはありませんでした。ガットギターからフォークギター、さらにはエレキギターとその種類、好んで弾く音楽は時とともに変わってきましたが、今でも週に数時間、無心でギターを弾いている時間をいとおしんでいます。さすがに最近ではちゃんとCDで原曲を聴いた上で練習したり、自分の演奏を録音してチェックしたりします。正統的なクラシックの音楽教育を受けた人から見れば我流のギターなぞ音楽とは言えないかもしれませんが、好きな曲を自ら奏でる欲こそ音楽ではないのか、と今は考えるようになりまし。だんだん父の境地に近づいてきたようです。そのうち私の娘からは、何て古臭い曲を弾いているんだと笑われるかもしれません。

はじめての海外

伊藤 篤 (平元年卒)

恥ずかしながら、(本人は全く恥ずかしいとは思っておりませんが)私はこの国際化時代において、自分が海外渡航するとは思っていませんでした。海外旅行も全く興味がなく、実は、新婚旅行もなんと京都でありました。

私は職場が情報通信部なので、携帯電話の基地局設備にも目を配ったが、アンテナの支持物にも一部ではあるが木柱を使用していたのは驚いた。また、送電鉄塔の塔頂部や中間部にアンテナが取り付けられていたのも日本では考えられない。合理的な考え方というよりもこれも、ただ可能だから実施しているだけという程度的印象であった。ただ、主要道路沿いにはくまなくアンテナが張り巡らされており、数量的には相当金がかかっているであろう。また、パラボラアンテナに関しては、国内では昭和20年代、30年代に使用していたのとはほぼ同型のものが使用されていた。

そのきっかけとは、とある電力会社勤務の私が、労働組合の役員になり、その研修会に参加したことです。パスポートの取り方も知らない私は随分と準備に苦労しましたし、いきなりの海外で電力自由化を勉強せよと言われても随分面食らいました。以下に米国の街中を電力自由化の視点でちよつとだけ覗いた感想を、研修参加報告書としてとりまとめた中から抜粋しましたのでお楽しみください。

1 設備面の印象

自由化により、ギリギリまでコスト低減を追求するような印象は特に感じられなかった。車窓から電柱や送電線、変電所の設備を見ることができたが、決して立派とは言えない設備であるものの、ギリギリまで設備投資の削減を意識した内容というよりも、単に、電気を送るために身の回りにあるもので間に合わせた結果、日本よりもかなり安く仕上がっているという感じであった。電柱は木柱であり、配電線も裸線を使用していたが、これも地震が少ない、雨が降らないという環境の差もあるが、電気を送るといふ点ではこれで間

に合っているものでこれ以上の投資・開発はしていないだけという程度の内容に思えた。ただし、相当辺鄙と思われる場所にも電気の供給は配電線により行われており、決して手抜きとは言いきれない。

私は職場が情報通信部なので、携帯電話の基地局設備にも目を配ったが、アンテナの支持物にも一部ではあるが木柱を使用していたのは驚いた。また、送電鉄塔の塔頂部や中間部にアンテナが取り付けられていたのも日本では考えられない。合理的な考え方というよりもこれも、ただ可能だから実施しているだけという程度的印象であった。ただ、主要道路沿いにはくまなくアンテナが張り巡らされており、数量的には相当金がかかっているであろう。また、パラボラアンテナに関しては、国内では昭和20年代、30年代に使用していたのとはほぼ同型のものが使用されていた。

いずれにしてもこれは、米国の技術が遅れているということではない。日本も発電機など会社草創期は米国から技術援助を受けていたのであり、ただ日本の場合、国民性と言ってしまうまでも、一旦導入した技術を更に洗練化・高度化・高信頼度化させていく傾向が強すぎるようだ。米国では一旦確立した技術・製品については特に必要がなければそれ以上の開発は行わず、壊れるまで使い続けているだけのようだ。

道路はとにかく広い、立派ではなく広い。(日本は立派だけと狭

2 住環境

決して日本の住環境が劣っているとは思えない。一般的な住居・土地については仙台と比べ特に広くもない。建物構造も特に洗練されているとも思えない。要は貧富の差が激しいのであり、少数の金持ちは高級住宅でプール付の豪華な住宅を持っているが、そうでなければ日本のサラリーマンと大差はない。ただ、農村ではキャンピングカーやボートの所有者が多いようであったが、これもただっ広い国土でレジャーを楽しむ知恵にすぎないと思われる。

3 競争環境

米国は自由競争の国として有名であるが、現在では、流通、通信などは寡占化の状態にある印象を受けた。つまり、でかい市場を少数の企業が分け合っている結果、業績が良いだけのようだ。これが自由競争により淘汰された結果なのか、歴史の浅い国なので初めから資本力のある企業が市場をコントロールしてきた結果なのかかわからない。

4 停電

5泊7日の視察であったが、停電は一度も遭遇しなかった。また、日本ではお馴染みの道路工事や電気工事にも遭遇しなかった。

5 人種

アングロサクソン系の白人は以外と少ない。たしかに自由の国だと思われるが、民族や米国民となつた年代によりある程度職種が限定されているような気がする。つまり、接客業にはアングロサクソン系の白人はいない。視察先のC

ECやSMUDで初めてアングロサクソン系の白人に遭遇した。人件費が安いのもこのあたりが原因であろう。

6 IT

あれだけ国土が広ければインターネットは自然と普及するであろう。どこで安売りしているかなどの情報は日本ではチラシなどで簡単に手に入るが、米国ではそのような手段は全く無意味である。要は必要に迫られただけであろう。あまり乗せられない方が良いという印象だ。

7 公共事業

日本は数千年の歴史があり、はつきり言って投資すべきところは無いくらいである。米国は歴史が浅い国であり、国土も広すぎることから、まだまだ開発する余地はいくらでもある。

8 発電所メンテナンス

地熱発電所の視察では、以外に従業員の数が多いことに驚かされた。発電所のメンテナンスは、タービンなどの特殊品を除き、社員がすべてメンテナンスしており、日本のような請負化、委託化は進んでいないようである。これは日本のような企業グループを形成していないことと、国土が広すぎて一々技術員を呼ぶことができないことと、壊れたときは壊れたときという割り切りによるものである。定期点検は5年に一度である。

9 アイムソーリー

老弱男女を問わず（小さな子どもも含めて）、すれ違いにぶつかりそうな時などは必ず「アイムソーリー」と声を掛けられ、不愉快な

思いをしたことは一度もなかった。この点は多いに見習うべきである。

10 まとめ

米国の電気が日本より安いと言われているのは、ぎりぎり安くしたというよりは、ただ安いだけというのが本質のようである。したがって、これ以上安くする必要もないレベル。日本の電気は、国民性として米国と比較すればまだまだ安くできるレベルになってしまったレベル。ぎりぎり安くするたに苦勞が虚しいものにならないよう知恵を出していきたい。以上、色々と生意気なことを記しましたが、この次は北欧にオーロラを観にプライベートで行つてみたいものです。パスポートは10年ものを取付したことです。

子供の誕生

岩見 紀征（平8年修卒）

2月12日夕方、難産の末に待望の我が子が誕生した。母子ともに健康で、3224gの元気な女の子。自分によく似ている。早速抱いてみるが、本当に小さい。しかし、このくらいの子供が、よくお腹に入っていて、そしてよく出てきたなとも思った。子供の写真やビデオをとり続ける。相手は泣くか寝るかだけなのに声をかける。ついに自分も親ばかの仲間入りをした。

結婚して半年経ったが子供がでる気配が無い。もしかして出来にくいのかと心配しはじめた6月、同僚とプロ野球観戦に行く途中に携帯が鳴った。妻からの「子供

供ができたよ。」と言う連絡に、思わず喜んで叫びそうになったが、車で送ってくださった方には子供がいない。さすがに自重した。野球の方は、貧乏球団の我ががカープが巨人の金満打線にメツタ打ちを食らった。大人と子供がやつてるような試合に、普段なら完全に頭に来るところだが、その日はそんなことはどうでもよかった。

これからまさに幸せな暮らしが待っている。そう思ったが、どうも妻の体調がよくなかった。お腹がよく張り、しょっちゅう痛んだ。そして真夏が来た。うだるような猛暑が続き、最初は軽かったつわりが急にひどくなった。発熱したこともあった。つわりと暑さが重なり、女房の元気がなくなつていくのが分かった。そしてある日、仕事中に連絡が入った。「切迫流産で入院するかもしれない。」そんな事を聞くと気が気ではない。飲み込みの予定があつたが当然キャンセルした。家に帰ってみると、女房は横になっていて、とりあえず、しばらく安静にしていれば問題無いとのこと。多少は安心したが、やはり心配だった。まだ予定日まで相当ある。

あまり知られてないし、自分も知らなかったが、妊娠中はホルモンの関係で眠気におそわれる。人によっては、つわりもひどい。それなのに、一般的な出産休暇は、産前6週・産後8週。これは余りに短いのではないかと思う。出生率が下がって当然ではなからうか。

妻は寝たきり妊婦となつてしまつたが、お腹の子供はずっと元気だった。標準よりも早くから胎動が感じられはじめた。誰に似たのか落ち着きが無い動きである。「一体何を君はそんなに動いているんだい。」まだ見ぬ我が子にそう言いながら、お腹をさする毎日だった。

そうこうしながら、お腹はどんどん大きくなり、女房の体調もだいたい安定してきた。かなり月数が経つまで逆子だったが、ある日突然直つた。夫婦間に安心感が漂ってきた。のろのろ歩きの嫁とたまにデートに出かける。そろそろ名前の話題にもなつた。そして、超音波診断で女の子ということが分かった。男の子でも女の子でも、元気ならどっちでもよかった。さつそく女の子用の服を買いはじめた。

1ヶ月前になると、妻はアパートから車で30分くらいの実家に里帰りし、出産に備えた。寂しくはなつたが、期待感の方が強かつた。出産日前日の朝6時頃、電話が鳴り叩き起こされる。前の日に会つた時には兆しはなかつたが、とうとう陣痛が始まつたか。そう思

い電話を取ると、「破水が来て出血もしているけど陣痛はまだ来ない。今から病院へ行く。」とのこと。急いで車を飛ばした。破水がくると赤ん坊に感染症の恐れがあるので、陣痛促進剤で48時間以内に無理にでも産むことになる。しかし促進剤をうって陣痛が弱い。陣痛による収縮で子供は産まれるのに、肝心の陣痛が弱

い。結局その日は陣痛がおさまつてしまい、次の日に持ち越しとなる。心の中に暗雲が立ち込めた。

その日の晩はアパートに帰ったが、疲れているのに、なかなか寝付けなかった。1時間半おきに目が覚めてしまう。女房の写真を眺め、母子ともに元氣であることを心の底から祈った。

次の日、病院に向かうと、今度は本格的に陣痛が来ていた。苦しそうな女房を気の毒に思いつつ、陣痛が強くなったことに喜んだ。しかし、なかなか進まない。あとから陣痛室に来た女性が先に分娩室へ向かい、そして無事出産する。妻はなかなか分娩室に呼んでもらえなかった。

そして、ついに妻が分娩室に入った。今回は立ち会わず外で待つことにした。田舎にある医院とはいえ、広島の名医と言われる先生だから大丈夫だろうと自分に言い聞かせた。しかし、時々出入りする先生や助産婦さんの表情が冴えない。時間がどんどん過ぎていった。何かあったのだろうかと思もみ続けた。しばらくして赤ん坊の泣き声したが、さつき産まれた子供もまだ中にいる。まだ先生が出てこないし、産声ではなかったのか。中の様子が気になって仕方無かった。その後、少し経って先生が現れ「母子ともに元氣です。女の子です。」と暗い表情で言った。そのトーンの低さに何かあったのかと気をもんでしまい、まだ素直に喜べなずにいた。しばらくして母子と対面し、やっと安心した。後で聞いたら、先生がた

だ疲れておられただけだった。吸引してもなかなか出ず、最後には看護婦さんが総出で乗っかって押し出したらしい。一時、赤ん坊の心拍数が低下したため、慌てて無理矢理にでも出したそうだった。

やはりさつきの泣き声は産声だったのだ。産声を聞いて喜び、先生の言葉でさらに喜ぶ。そういう風景を想像していたが、少し違った。

難産の子供はよく育つと言われるように、その後、娘は日に日に成長している。大人とは違って一日一日の変化が大きい。よく飲みよく寝て、よく泣く元氣な赤ん坊である。時々満面の笑みを浮かべてくれる。見ていて楽しくてしかたがない。

これからは父親としての責任がかかってくる。9歳で父親を亡くして依頼、久しぶりの家族らしい家族である。自分を見詰め直すと、果たして父親としてやって行けるのか少々不安にもなる。しかし、無数の人が通ってきた道であり、俺にだってできるだろうとも思う。ともかく、今は親馬鹿気分になりきっていたい。

同窓会だより

卒業50周年のクラス会

秋もたけなわ、さる11月26日に、昭和26年卒のわれわれは、懐かしい京都で50年記念のクラス会を開くことができました。昭和23年入学時は多分50名。いま名簿に載っているのは37名。このクラス会の

出席者は27名で出席率73%。それに奥様がたが8名で、計35名とまらずの出席でした。

紅葉の時期には少し遅かったようですが、それにしても26日は、嵯峨野トロッコ列車、保津川舟下り、そして嵯峨観光と元氣を出して歩きました。その夜はホテルでの宴会。もう現役の人は少なくて、仕事を離れ50年前の電気教室の談話室か小使室での学生時代に戻ったような気分になって語りあいました。平均年齢75歳?。さすがに病気の話が出るが多かったのですが、病を克服して意気軒昂な話に勇気づけられました。27日は、桂離宮や、東福寺、泉湧寺などへと繰り出し、秋を十分に満喫することができました。

われわれのクラスは、第三木曜日に東京では奇数月、大阪では偶



数月と毎月集まって昼食を囲みながらの会合を楽しんでいます。このように全国のクラスメイトが集まるのは年一回。来年は東京在住者がお世話することで、再会を約束して別れました。

寿栄松 憲昭(昭26年卒) 記

洛友十八年会・東京下町周遊

昭和18年卒業生は毎年関西と関東で交互に一泊旅行をしています。今年も関東の当番で、気候のよい11月中旬に懇親を主にして歩く距離の少ない計画としました。

当日の参加者は総員16名、うち関西6名関東10名、また夫妻4組で、やや少ないのは残念でした。

第一日(11月12日)は東京駅に集まり、皇居近くのKKRホテル(国家公務員共済組合系)の宴会場で再会と互いの健康を喜び、また近況報告などに時間の経つのも忘れて語り合い、同ホテルに宿泊しました。

第二日(11月13日)は貸切りバスで先づ深川の江戸資料館に行き、古い町のたたずまいや、そこに暮らす人びとの日々の営みに江戸の昔を偲びました。再びバスで浅草に行き一同で観音様にお詣りした後は、雷門まで三々五々仲見世をひやかし、六区まで足を伸ばす元氣な人も居りました。昼食は江戸情緒たっぷりの駒形どぜうの「どぜう鍋」に舌づつみを打ち吾

妻橋詰の水上バスの乗りばへ。展望のよい大型の観光船で隅田川にかかる12の橋を次々にゆったりとくぐり抜け約40分で船はやがて浜離宮恩賜庭園の船着き場へ。ここは徳川将軍家の別邸の「浜御殿」と称された江戸時代の代表的な大名庭園で、一巡する頃には皆さん少々お疲れの様子。

一同で記念撮影の後再びバスで東京駅へ。午後3時のほぼ予定どおりの時刻に、お互いの健康を祈り、来年の再会を約して解散しました。

我々のクラスは殆ど全員が傘寿を超えて、身体の故障を訴える人も多く、このような会をいつ迄続けられるか危惧しておりますが、まだしばらくは続けたいというのが、参加した方々の希望でした。写真は浜離宮にて



支部だより

東京支部 2001年旅行会の報告

参加者(敬称略) 池上夫妻、植田夫妻、並木夫妻、荷口夫妻、伊藤、稲野、河原、森、楠本、近藤(文)、杉根、木村、木村 博一(昭18年卒) 記

2001年12月1日(土)、洛友会東京支部の旅行会を実施しました。目的地は西伊豆の戸田(へだ)温泉です。当日は好天に恵まれた中、美しい富士山を望み、高足ガニに舌鼓を打ち、紅葉も堪能して、大変楽しく、有意義な1日を過ごすことができました。また旅行中に雅子さまの女の子誕生のニュースも入り、一生忘れ難い、印象深い旅行会となりました。

当日は朝8時15分に東京駅の鍛冶橋駐車場に総勢39名が集合し、8時40分にバスで出発。東名高速道路が事故で渋滞し、沼津に着いたのは12時頃でしたが、途中バスの中では自己紹介と近況報告会を催し、学生時代の話や、趣味の話や、健康法の話や、果ては夫婦円満の秘訣まで、あらゆる楽しい話が飛び出し、全員にマイクが渡り終わったときには、車窓から沼津の海が見えていました。



の魚介類のお土産をしっかりと購入。12時20分には、沼津を出発して伊豆半島へと進み、修善寺を経由して13時20分に達磨山の展望台に到着し、青空を背景色にして、海の向こうに富士山という絶景を楽しみつつ、全員で集合写真を撮りました。カメラタイム終了とともに達磨山を後にして、赤色や黄色に色づく山々の風景を車窓から眺めながら、バスは戸田温泉へと山を降りて行き、13時40分に、「ときわや」に到着しました。「ときわや」では、林様(S10卒)の乾杯に始まり、高足ガニをはじめ海老や刺身など豪華な料理に大満足。特に名物の高足ガニの大きさには、大変驚きました。1時間半の昼食時間は、あつという間に過ぎてしまいました。「ときわや」の6階には、海と山を望める

る屋上露天風呂もあり、昼食後に一風呂浴びた人もいました。なお、この昼食時間に雅子さまの女の子誕生のニュースが入って来ました。15時30分に「ときわや」を後にして、修善寺梅林にある「もみじ林」に向かいました。日暮れが早いこの季節、駆け込みセーフで「もみじ林」に到着し、集合写真を撮りパチリ。紅葉の小道で散策がてら小高い丘を登りきった所で、紅葉を左右に配した水墨画のような富士山にまさかの再会を果たし、皆さん本当に登って良かったと感想を漏らされました。16時35分、あたりも暗くなり始めたところでバスに乗りし、一路、東京へ。ほぼ予定どおり20時05分に東京駅前

に到着し、海産物のお土産を持って、三々五々の解散となりました。柴沼 敏郎(昭58年卒) 記

お知らせ 会員の陶坊資氏がかって会報(第139、151号)に連載された「中国雑記」を修正加筆し「ここが違う!日本と中国」(二つの母国の生活体験)を出版されました。詳しくは陶氏までお問合わせ下さい。(TEL) 03-55036156 98

日(土)に企業見学会を開催し、ネームプレート製造からハイテク分野のプリント基盤製造など、すぐれた技術力でグローバルに事業展開されている、「株式会社石井表記」の工場を見学しました。今年度からの試みということもあってか、参加者は11名とやや少な目でしたが、興味深いプリント基盤などの製造工程の見学や、海外事業展開などの経営戦略の熱のこもった話もあり、とても有意義な見学会になりました。また、そのあと訪れた尾道市の千光寺公園では菊花大会が催されており、晩秋の公園散策を楽しむことができました。今後も見学会が中国支部の恒例行事となるよう継続して企画していきたいと思えます。山本 武司(平4年卒) 記

第6回ゴルフコンペ開催 中国支部では、平成13年12月1日(土)戸山カントリークラブ(広島県広島市)にて第6回ゴルフコンペを開催しました。年1回の恒例行事となっている当ゴルフコンペも6回目となりましたが、今回はやや少なめの10名の参加者によりプレーを競い合いました。当日は絶好のゴルフ日和に恵まれ、10名の参加者は優勝目指して真剣に、かつ楽しく和やかにプレーを満喫しました。プレー後の表

彰式を兼ねた懇親会でも大いに盛り上がり、今後も継続してコンペを開催していくことを誓い合いました。今回の優勝者は、ネット74(グロス84)のすばらしいスコアを記録された石田隆弘氏(昭和25年卒)、第2位は上田博之氏(昭和57年卒)、第3位は大森乾司氏(昭和45年卒)となりました。当支部のゴルフコンペは恒例行事としてさらに充実していきたいと考えています。次回以降も支部全員にご案内しますので、多数参加いただきますよう、よろしくお願いたします。松本 鋭(平4年卒) 記



本部だより

平成14年度総会のお知らせ

平成14年度本部総会は左記により開催されます。会員の皆様

日・時 平成14年6月8日(土) 午後16時30分より

関西支部総会に引続いて開催いたします。

場所 大阪中之島センタービル内

リーガロイヤルNCB

(TEL) 06-6444-3122 51

推薦会員の紹介

平成14年2月2日開催された役員会で、次の方々

電気工学専攻

教授 宅間 董 (東大41博)

助教授 星野 勉 (東工大57博)

講師 松澤 淳一 (東大1博)

助手 山本 修 (立命大45)

齋藤 啓子 (東北大46)

中村 武恒 (九大10博)

電子物性工学専攻

教授 松重 和美 (九大45)

ケースウエスタンリザーブ大50博

助教授 山田 啓文 (理57修)

川上 養一 (阪大1博)

芝内 孝禎 (東大4修)

石田 謙司 (九大7博)

中村 敏浩 (理8博)

情報学研究科

教授 森広 芳照 (東工大48博)

中村 行宏 (数理44修)

松田 哲也 (医63博)

助教授 尾上 孝雄 (阪大5修)

乗松 誠司 (阪大60)

和田 俊和 (東工大2博)

講師 廣瀬 勝一 (情報2修)

杉本 晃宏 (東大1修)

助手 松尾 敏郎 (同志社大43)

泉 知論 (東工大10博)

梅原 大祐 (東工大11博)

水田 忍 (人環7修)

エネルギー科学研究科

教授 近藤 克巳 (名大48博)

野澤 博 (金蔵加工47修)

助教授 中村 祐司 (原子核62博)

助手 別生 榮 (東大53博)

宙空電波科学研究センター

助手 堀之内 武 (理4)

エネルギー理工学研究科

教授 吉川 潔 (原子核41)

助手 岡田 浩之 (原子核58修)

竹内 右人 (原子核60修)

竹内 壽之 (立命大41)

講師 多田 博一 (東大5博)

印は平成9年度に承認された方々。

事務局だより

平成13年度会費納付状況報告

平成13年度も年度末を迎え、会計事務も決算期となり、例年どおり推移グラフを示しますが、例年どおり年会費の納付状況についてご報告を申し上げます。

まず、平成14年2月末日現在の会員数(A)は6527名で、平成13年4月から平成14年2月末日までに会費を納めて頂いた会員数(B)2836名でした。

前年同期と較べると、会員数は142名の増加となっておりますが、会費を納めて下さった会員数は71名の増加に止まりました。

納付率(B/A X 100) %は43.4%となりました。図1に納付状況の推移グラフを示しますが、ほぼ昨年並みとなっております、やはり低い水準です。

また、図2には卒業年次別の納

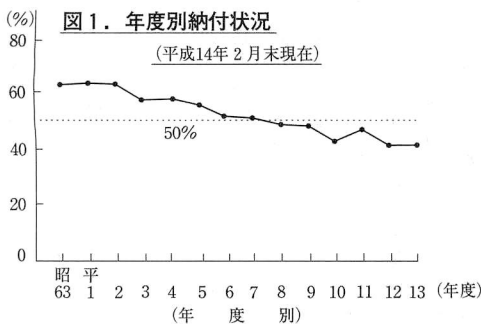


図1. 年度別納付状況

(平成14年2月末現在)

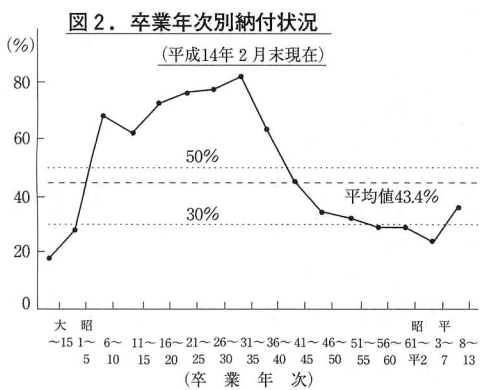


図2. 卒業年次別納付状況

(平成14年2月末現在)

付率を示しますが、昭和31年(35年の82%)を最高に以後急激に低下し、昭和56年以降は30%を切り、これが全体の納付率の低下に大きく影響を与える結果となっております。

平成14年度各支部総会開催のお知らせ

平成14年度の総会は次の日程で開催されます。開催に関する詳細は、支部幹事の方からご案内の予定です。

Table with 2 columns: Branch Name and Meeting Date. Includes九州支部 (5月17日), 中国支部 (5月28日), 四国支部 (5月31日), 関西支部 (6月8日), 東京支部 (6月16日), 中部支部 (6月29日).

編集後記

今年の桜の開花は観測史上最も早く、地球温暖化の影さようでしょうか？

今春も192名の新会員を迎え、洛友会も隆盛です。ご活躍を願っております。

桂キャンパス建設も順調で来年の春の開校が一年後に迫りました。

本号には若い会員からのご寄稿が特筆事項でした。

計報

事務局

Table with 3 columns: Name, Age, and Address. Lists members like 甲斐 義春 (13), 占部 五郎 (14), etc.

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。